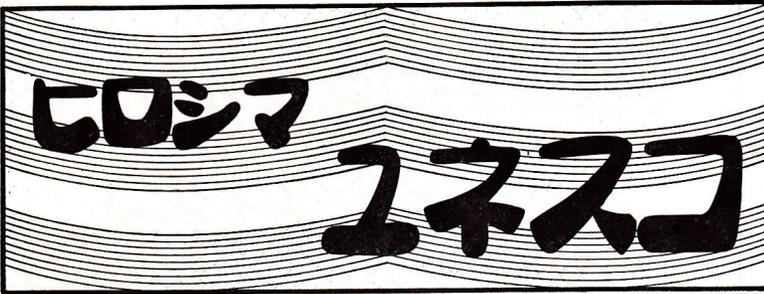


ユネスコ会員綱領

心の中に平和の守りを固めよう
 すべての人間の尊厳を重んじよう
 教育・科学・文化の発展に努めよう
 民族間の疑惑と不信を除こう
 世界を友愛と信頼のきずなで結ぼう



アメリカを支える フロンティア精神

アメリカ見聞記

強い風土と文化のかかわり

広島ユネスコ協会副会長 信井 正行



一九七八年、機会があつて、アメリカに旅した。わたしは、風土と文化との関わりであつた。

州都ダラスからウエイコまで

一六〇キロのテキサスの大草原をバスで一気に走つてみて、改めてテキサス州の面積が日本の二倍であるという事実を実感したのである。

そこからは、なんでも世界一、あるいは世界のインシアタイプはわれこそというアメリカ人気質が生れてくるものと思われる。もつとも、広大な風土とは対照的に、ヨーロッパ二千年の歴史に対しアメリカは建国二百年

創設当初は、第二次世界大戦で荒廃した教育等の復興をはじめとして、諸国民の間の国際理解の増進、国際的協力の推進のための諸活動が事業の主体を占めていたのですが

ユネスコにおいても発展途上の教育、科学、文化の発展に協力、援助する事業が重視されるようになりました。一九七四年には、第六回国連特別総会では、南北間格差の是正を目指すものとして「新国際経済秩序の樹立に関する宣言」が採択されました。ユネスコにおいても諸活動を通じて、この「新秩序」の樹立に貢献することが強調されております。(文部省・「ユネスコと日本」より)

ユネスコ発展の動向

ユネスコの加盟国155か国に

一九四六年創設当初二十か国に過ぎなかつたユネスコ加盟国は、その後、主としてアジア、アフリカ等の新興諸国の独立に伴い、年を追つて増加し、一九八一年十二月現在、百五十五か国を数えるにいたりました。このように自然環境、文化、政治体制、経済的条件、発展段階等を異にする多数の主権国家の加盟により、かつ、国際環境の変化に伴い、ユネスコの事業活動も多様化し、重点の移行もみられました。即ち、

一九六〇年前後、新興独立諸国が大挙して国連やユネスコに加盟し、一九六〇年に、国連が一九六〇年代を「開発の十年」とすることを決めたことを契機として、これ以降、

の歴史しかもたないという現実もある。

彼等は、そこにコンプレックスを感ずると同時に、自分たちの歴史をたいせつにしようとす

る。ウエイコで会つた人々はこんな話をした。

「南北戦争はまだ結着がついていない。」

なんと息の長い話ではないか。

わたしたちにとって明治維新は、はるか彼方の出来ごとであるが、彼等と南北戦争はまだ繋がっているのである。こゝも言った。

「アメリカを支えているのは北部の連中のやっている工業ではなくて、南部の農業である。北部の連中は墮落している。」

かねて、わたしはアメリカの強大さに疑問を感じていたが、歴史をたいせつにする、さらに自分たちの歴史は自分たちでつくっていくのだという意気込みを感じ、アメリカを支えているバックボーンというようなものを強く感じたのである。

広大な風土とそこに敢然と立ち向つていくフロンティア精神は、少くとも、テキサスにはいままも力強く息吹いている。

(広島市中央図書館長)

「サロン・ユネスコ」から 「チャレンジ・ユネスコ」へ

第三十八回日本ユネスコ運動
 全国大会が、去る十一月十
 三日から三日間、沖縄県で開
 催された。広島ユネスコ協会
 からは、内海巖顧問と高橋昭
 博常任理事が参加された。
 ここでは、高橋氏に、大会
 参加の報告をしていただくこ
 とにした。

世界の連帯と地球の平和を

第三十八回日ユ運動全国大会、沖縄で

第三十八回日本ユネスコ運動
 全国大会が、昭和五十七年十一
 月十三日から十五日まで、沖縄
 県那覇市民会館とパシフィック
 ホテルで開催された。今回のテ
 ーマは、「ともに築こう世界の
 連帯・地球の平和」であった。
 沖縄は、第二次世界大戦の、日
 本国土における唯一の戦場とな
 ったところで、この地において
 全国のユネスコマンが平和と連
 帯について討議したことは、き
 わめて意義深いものであったと
 思っている。

風化した「ひ めゆりの塔」

私は、昨年、初めて沖縄を訪
 れ、平和祈念資料館を見学し、
 「ひめゆりの塔」に参拝した。
 礼拝をして深い黙とうを捧げ、
 約二十分間、塔の周辺を見てま
 わった。戦時下、ひめゆり部隊
 がいた残壕も沈痛の思いで見
 た。観光客がつきつきとやって
 きたが、その中には戦後世代の

若者たちも大勢いた。私がか
 にいるあいだ、誰一人として礼
 拝し、手を合わせた者はいなか
 った。わいわい騒ぎながらパチ
 パチとカメラのシャッターを切
 っていた。そして、壕の中をま
 るで見せ物でも見るかのよう
 に、興味本位に見ていた。私
 は、余りにもひどい風化現象に
 驚き、啞然とした。この「ひめ

ゆりの塔」にまつわる悲劇を彼
 らは知らないのだろうか。い
 や、そんな筈はない。深い知識
 はなくても、何があったのか位
 は知っていただろう。「これで
 いいのか?」と、私は、暗たん
 たる思いに打ちひしがれた。そ
 うした複雑な気持ちを抱いて、
 再び沖縄の地をふんだのであ
 った。

ユ・運動に必要な「変革」

日ユ協連の伊藤昇理事長は、
 今回の全国大会の意義につい
 て、第一回国連軍縮特別総会の
 最後に出された宣言の言葉を引
 用され、「例年にもまして、平

ている者が、心を新たにして、
 手をしっかりとつなぐ時がきてい
 るのではないでしょうか」とユ
 ネスコ新聞に書いておられる。

和、軍縮、核兵器につき、私ど
 もが真剣に研究・討議する場と
 なることを期待します。そのこ
 とは、戦争を知らぬ青少年に平
 和の尊さを教えることにつなが
 り、ユネスコ活動の大切な使命
 であると考えるからです。人類
 が自滅の危機に直面しておれば
 こそ、私どもユネスコ活動をし

私は、今回の大会シンポジ
 ウムで、琉球大学教授の大田昌
 秀先生らとともに講師の一翼を
 務め、「平和・軍縮の問題を地
 域でどう取り組むか」の分科会
 では、大田先生とご一緒に助言
 者に加わった。いたらぬ私が、
 こうした大役を、まず無事に果
 たし得たのも、講師の諸先生や
 わが広島ユネスコ協会顧問の内

海巖先生、日ユ協連中央委員の
 尾花珠樹先生らの適切な名司会
 があったればこそであった。

今回の大会で、私は、「平和
 の原点は人間の痛みがわかる心
 を持つことです」と訴え、二人
 のツッパリ少年、非行少年の人
 間変革の実例や、アメリカ、日
 本の良識ある政治家の保守・革
 新（こういう言い方は、本来私
 は好まないが……）のわくをこ
 えた軍縮活動のようすなどを紹
 介した。その少年の住所を教え
 てほしい、アメリカの資料を送
 ってほしいという要望が会場か
 ら寄せられたことを、私は、大
 変喜こんでいる。私が話した内
 容などは、日ユ協連発行のユネ
 スコ新聞を参考とされたい。

今後、ユネスコ運動は、「サ
 ロン・ユネスコ」から「チャレ
 ンジ・ユネスコ」へと大きく脱
 皮して行かなければならないと
 痛感している。この変革が、除
 々にではあるが、ユネスコ運動
 に芽生えつつあるようにも思え
 る。しかし、それは、まだまだ
 若芽にしかすぎない。これから
 年を重ねるごとに、枝となり、
 葉となり、やがて大きな幹とな
 って根を張って行くことを私は
 期待し、私自身も微力を尽した
 い、と思うのである。そのとき
 は必ずやってくるはずである。

（常任理事・高橋昭博）

アジア競技大会を視察して

肌で感じたインドの底力

1990年は広島で

一九九〇年開催予定の第十一回アジア競技大会広島招致運動をアジア競技大会広島招致委員会(広島県・市・商工会議所及び体協関係者)が中心となって四年前から継続的にすすめていることはご案内のとおりです。

第十一回大会の開催地を八十年のロスアンゼルスオリンピック大会期間中のAGF(アジア競技連盟)の評議員会で決定することになっていきます。

私は、この第十一回大会を広島に招致するため、三十二か国代表に働きかける目的で派遣された広島招致使節団(団長・中野重美県体協会会長 副団長・苦米地行三助役、県二名、広島市五名、同市議会三名、体育、経済団体六名、計十六名)の一

員として十一月十六日成田を出発し、同日深夜ニューデリーに到着しました。(飛行時間十三時間、時差三時間三十分)

十七日はシンAGF会長、原インド大使、十八日、プタ・シン特別組織委員会委員長(兼供給・スポーツ大臣)を表敬訪問して、広島招致の協力とレセプション出席を要請しました。

十九日、感動的な開会式に参列しました。史上最多三十三か国、約四千六百人の選手・役員が工夫をこらしたユニフォームで、七万人の大観衆を前に堂々と入場するのを見て、強い感激を覚えました。この日は、ガンジー首相の六十五歳の誕生日であり、インドの人々の興奮は最高潮に達していました。私達

は、在デリー日本人会から拝借した日の丸の小旗を力強く振って、日本選手団の行進を歓迎しました。アジア競技会は、国境、民族、イデオロギーを越えたスポーツの祭典であり、スタジアムの電光掲示板には「友情、兄弟愛いつまでも」の文字がありました。

二十一日夜、JOC共催で、各国のAGF評議員、選手団長が出席して、盛大に開催され、日本人会二十二名の応援を得ての懇談、団長のスピーチ、映画の上映等で出席者には一応の理解を得た点で成功だったと思います。

全体的な印象として、アジア競技会は、友情と平和のスポーツの祭典であるといえ、入場式の順序に変更があるなど、アジアの複雑さと奥行きを深さを認識しました。インドについては、感動的な開会式を実現させたインドの隠れた底力(文化、国民の能力)を肌で感じて、日本が他のアジア諸国と共に繁栄するためには、インドを抜きにしては考えられないと感じました。

競技運営や施設の視察を行う三名の団員を除いて、二十三日夜任務を無事に終えて帰国しました。(常任理事・藤井正一)

ユネスコ一ロメモ

国連大学

国連大学は、国連によって設立された国際機関の一つですが、大学としての目的達成に必要な自治、学問の自由を認められた非政府機関です。

また、国連大学は、国連憲章の目的、原則に則り、人類の

発展、福祉にかかわる緊急かつ世界的な諸問題の研究、大学院レベルの研修及び知識の普及に携ることを目的とした学者、研究者の国際的共同体です。

同大学は、国連とユネスコの共同の管轄下におかれ、理事會、大学本部(学長及び大学センター)、直轄の研究研修センター(現在未設置)及び国連大学と提携協力関係を

結ぶ世界各国の大学、研究機関、研究者によって構成されています。

東京の大学本部では、今年一月現在、学長の統轄のもとで、百五十名の職員が働いています。そのうち、日本人職員は、学長特別顧問、副学長(四名中の一名)をはじめ五十六名です。(文部省・「ユネスコと日本」より)

吉岡歯科医院

院長：吉岡尊治
(広島ユネスコ協会維持会員)

広島市東区牛田本町二丁目6-10
電話 228-0862

俣野耳鼻咽喉科医院

院長：俣野仁一
(広島ユネスコ協会理事)

広島市西区己斐本町一丁目3-9
電話 271-4866

随想

はるかなる 畏友によせて

山崎克洋

秋の夜長には、ギターの音色がよやく美しく心の底まで響いて、日頃から衣食なんかよりももっと本質的なものだと考えている人間のひとりである。学生時代にふとしたことからアルゼンチン音楽の魅力にとりつかれ、現在まで続いているが、こんなことが機縁で、四十一年にアタワルパ・ユバンキという偉大な音楽家と知り合うことが

できた。彼は、アルゼンチンの人間国宝的存在の文化人で、偉大なギター奏者であると同時に作曲家であり歌手であり詩人であり、そして民俗学者である。五十一年、彼が三度目の来広をしたとき、広島島の歌をつくっているところだということ、それを色紙に書いてくれた。その時は未完成であったが、後日、中南米音楽という雑誌に全文が掲載されたので、次に紹介しよう。

ヒロシマ（私の忘れ ない町）

不死鳥のように灰のなから生まれかわるもの。ペートルヴェンの交響曲のように苦しみの彼方のよろこびにたどりつくもの。伝説の英雄のように細胞の

ひとつひとつによみがえり来るもの。流れる動脈の鼓動をととのえ、筋肉をきたえ幾世紀をへた水と光で魂を浄めるものよ、ついには私たちはおまえをとりもどしおまえの姿を後の世にとどめるのだ。生きることの業のなかに、本の中に、歌と希望のなかに。未来を耕すもの、夢の種子をまくもの。そんな風に私の心はお前を感じる。お前に恋して。ヒロシマ！

おまえの夜は何という夜。ひきちぎられたキモノ、この地の上のすべてが太陽であったときに……国境を越えた恐怖、子どもをなくした街。山の松も、野の稲もなく、小鳥もなく、星空のもとに物語りをつづる竹の笛もなく、すべては大きな静け

さ。讃歌もなく、別れの言葉もなく涙も、讃歌も。ただあるものは巨大な身の毛もよだつ驚き。ヒロシマ！
しかし神はおまえの心優しさを守ってしてくれた。おまえの聖なる種子を、おまえの深い声をかくしておまえは傷をいやしよみがえった。やがて、あてやかな桜のはじらいはまた色とりもどし、母親たちは、たそがれどきに、とぎれたことのない歌をふたたびはじめた。ねんころろ、ねんころろ。こんな風に恋した私の心はおまえを感じる。こんな風に、私のアルゼンチンのギターはおまえを歌う。こんな風に、私はおまえに別れを告げ、おまえのなかにとどまり続ける。ヒロシマ！

× × ×
こんな素晴らしい詩がユバンキによって寄せられたにもかかわらず、広島ではなんの反響をも呼び起こさなかった。彼のことだからきっとこの詩に曲をつけて、アルゼンチンやヨーロッパのどこかで、演奏曲目に選んで歌っていることであるが、遠く離れた広島に地にはその消息を知る由もない。あれから六年、心臓病をかかえるユバンキもすでに七十四歳。彼の存命中にはたして広島でこの曲を聞けるのはいつのことであろうか。（常任理事）



子どもたちが 国際交流学習

祇園公民館

広島市祇園公民館では、十月十七日から、「子ども日曜学校・国際交流コース」がはじまりました。これは、将来を担う子どもたちが、世界の国々の様子を知り、外国人の生きかた、考え方を理解し、また、外国人と仲良くすることを通して、平和な社会を建設することを目的と

するもので、毎週、異った国々の様子や歌を留学生を講師に三十人の子どもたちが、目をかがやかせて勉強をしています。「今日はインドネシアのことを勉強しました。赤道を真下に日本よりも熱い国。学校の始まりは午前七時だといわれたけれど、それまでに起きてお

なくてはならないのに、そのころは、まだ私はねむっていました。早起きだなあ。スライドを見て思ったことは、わりと日本と似ているようです。でも、海がきれいで、いろいろな民族の人たちの服や家、すごく色がはでなのや、いっぱい色ざりがついている服、水牛をかたどってつくった家など、家の中も見てみなかった」などと感想文を寄せています。テレビなどたちがって生きた外国の事情を知り、直

接日本語で会話できることは、子どもたちにとっては大きな魅力であり、今後の彼らの成長の過程に大きな意味をもつものとして期待しています。

学習が終わると、早速、「ダンケ」、「ハルタ・イエゴ」などとその国のあいさつをしたり、「アミゴ」と仲間をつかまえて握手したりして、喜々とした表情です。十二月二十四日の「年忘れのつどい」に招こうと子どもたちは、はりきっています。

今回のこの学校では、バンダラデンシュ、インドネシア、パキスタン、西ドイツ、メキシコ、ニュージーランド、中国、パナマの留学生を招いています。
（祇園公民館社会教育主事・佐伯一幸）

